

要』三、昭和五〇年三月。

(6) 築瀬一雄氏「忠胤僧都と言泉集」(『金沢文庫研究』八の九、昭和三年七月)。

(7) 長門本平家物語^{巻一}に、内容は全く不明ながら、永万元年八月、二條院の御葬送の折、「忠胤僧都が秀句」せしことが見え、同じく巻二に、導師の名前は記されていないが、次の

ような類話がある。或いは仲胤の説法であろうか。「導師、説法はてがたに、卯月はするじやくの月なれども、幣帛捧る人もなし、八日は薬師の日なれども、南無となふる音もせずと申たりければ、衆徒あはれに覚えて、一度にはつとかにて、衣の袖をぞぬらしける」

『撰集抄』に於ける美文の問題

下 西 善三郎

△△

説話の文章の表現技巧について、例えば山口仲美氏は、『今昔物語集』の文章を主に調査して、(1)詳悉表現、(2)列举表現、(3)挙遇表現、(4)反復表現、(5)比喻表現、(6)誇張表現、(7)漸層表現など、多数挙げておられる^{△△△}。しかしながら、ここに筆者が『撰集抄』について表現技巧の問題として取り上げようとするのは、山口氏が挙げられた如き例ではなく、次の如きものである。

(1) 道行文を取り込む表現技巧 (『道行文的美文』)
(2) 引歌(又は引詩)による表現技巧 (『引歌的美文』)
(3) その他、対句的ななど文飾意識の明らかなもの
右に挙げた表現技巧は、おそらく『撰集抄』編著者にとつて、一つには、西行的世界の造型のための意図的方法であつたろう(その成否はともかく)し、また、享受者にとつては、『撰集抄』説話の表現面における一特質を形成するものとして容れられたことであろう。多年、『撰集抄』が西行自著のものとして享受されてきた歴史を有するのも、遁

世を主題とする思想的側面のためばかりではなく、案外、こうした、中世一連の仏教説話集にあっては特徴的と思われる表現技巧に支えられるところがあつたためと言えるかも知れない。

本稿では、右に挙げた(1)・(2)・(3)の如き表現技巧を「美文」^{△世△}として把え、それを手がかりに、『撰集抄』の作者と表現の關係について考えてみたい。

以下、各々、例を引きながら検討することにした。

(1)

先ず、「道行文的美文」の例を挙げる。

越の白山雪つもりて、老蘇の森のはゝきよの風になびきやすく、佐野の野原のはやのすゝきそよめきて、おなじ心の末葉の露は、風に乱れてしどろなるありさま、木曾の懸橋、佐野の舟橋など見侍りしに、こころとどまるべき程なり。逢坂の関の関守とめかねし、秋にし山のうす紅葉見すごしがたく、はまちどりの跡ふみつくる鳴海渦、富士の山辺は、時しらぬ鹿子まだらの雪のこり、浮嶋が原、清見が関、大磯小磯の浦々は、すぎがたく侍るぞや。

(卷二一四、花林院永玄僧正事^{△世△})

卷二第四話は、「説話部」「説話評論部(1)」「説話評論部(2)」という三つの大きな枠組から成り立っている。今、

取り上げた例は、この「説話評論部(2)」の部分、即ち、諸國遍歴僧としての作者の述懐の中、換言すれば、遁世者としての漂泊の文脈の中に出現する。一般的に言つて、説話における作者の独自の筆の動きは、説話的叙述体が中心となる説話部よりは、説話伝承者の主観的な吐露の見られる付加的・批評的叙述部分に認められると言つていいだろう。筆者は、上の例に見る如き「道行文的美文」の表現技巧は、『撰集抄』作者の意図的措辞であらうと見る。とすれば、それは、自己表出性の高い説話評論部に出ることも首肯されるのである。後に述べる「引歌的美文」に特に顯著であるように、美文意識が高揚するのは、説話評論部が圧倒的なのである。

とは言え、説話部に「道行文的美文」が見られぬわけではない。例を挙げる。

おなじ比、越の方へ修行し侍りしに、甲斐の白根には雪つもり、浅間の嶽には煙のみ心ぼそうたちのぼるありさま、信濃のはやのすゝきに雪ちりて、した葉はいろの野辺のおも、おもひまし行まののわたりのまろき橋、つらゝむすばぬたに川の水の、ながれすぎぬる果てを知らする人もなき、峻しき山ぢの峯のくつ木の繁きがもと、木曾のかけ橋ふみみれば、いきて此世の思出にし、死して後の世のかこつけとせんまで覚えて待

りき。あづま路こそはおもしろき所と聞き置きもし思ひ侍しに、物数にもあらざりけり。野辺をすぐるには、武蔵野のしげれる中に入よりも、むら／＼咲ける草花、なか／＼心をいたましめき。山路にある折は、うつ／＼の山、つたのはそ道かよふよりも、すみわたるてぞ覚えし。さのの野辺には、袖はらふべき蔭もなしとながめ、信濃なるはやの薄の風もあらば、とながめけん、いとぶおもひあはせられて、なみだもそよるに落ち侍りにき。

かくて、やうやく、すぎ行に、かこのわたりに、いまたすこし行つかで、山のきはにて僧一人、男一人侍り。

……

(巻七—十四、越地山臥助男命事)

そもそも、説話の文章が、行動する人間の群れ、刻々と移り行く事件をあたかも眼前するが如くに描出するを以てその特徴とする^{八五}と言えらるるならば、右に挙げた例の如くに、所謂「事件」の展開部が、「道行文的美文」の終了する所から始まるという展開法は注意されなければならないであろう。いわば、右の例の「道行文的美文」は、語られる事件までのまさに道行に他ならないのである。こうした、本題に入る前段階で道行を形成する方法が、説話そのものにとつてどのように有効であり得たか、確言はし難い

が、作者を含めて登場人物の漂泊の過程そのものを狙った意図的記述であると言うことはできよう。しかしながら、それも、典型的な中世道行文との比較で言えば、音数律の不統一性、地名列挙の恣意性を指摘しなければならぬ。わずかに、歌枕名によつて美的イメージを連想させるものとはなっているけれども、漂泊者の悲愁を湛えた実質的な「道行」を形成しているとはいひ難いのである。

ところで、例文の中の地名は、遍歴の順路から言えば極めて恣意的な掲出であるが、その殆どは歌枕であることが確認される^{八五}。このことは、作者が歌枕文化圏の人間、即ち、伝統的な和歌文学世界に生きた人間であることを証するだろう。この点、『撰集抄』作者についての伊藤博之氏の「失意の境涯をすごすことを余儀なくされた貴族階層の一人である^{八五}」という言が思い合はされる。さらに、歌枕の成立は、「旅せぬ人も旅情を味わうことができる」という、文芸の世界の出現でもあった^{八五}はずであるから、『撰集抄』作者は歌枕列挙による「道行文的美文」によつて、漂泊の行為が孕む悲愁と憧憬の世界に読者を誘い込むことを企図したのだと言えるだろう。これを換言すれば、そうした「道行文的美文」は、遊行性をともなう聖としての西行^{八五}の漂泊に思いを致さしめる恰格の文体であつただろうし、いうならば、「西行的世界」の造型を目論んだ『撰集

抄』作者の、表現上の方法であつたろうと言えよう。とは言え、意図が意図を離れて、結果的には「表現に酔つてしまふ」作者が露わになっていゝと言へるかも知れない。いゝわば、西行に仮托して成される作者の文学意識は、堅固な道心を意識の彼方に押しやり、かつての貴族時代に培われていた無意識的な意識が、歌枕という文学の伝統に立ち返つた美意識としてこゝに立ち現れてゐるのだと言へばすまいか。

このことは、一人称で書き出される説話、即ち西行自記の体裁をとる説話が、いわゆる説話的事件の展開に到る前段階で、前口上を開陳することが多いことも無関係ではあるまい。例えば、巻一第七話「讃州白峯之事」の冒頭部分には、「後の世のためとも侍らねども」とは思うけれども、如何ともし難く「心すみて覚ゆる」風景があり、それを叙するに七・五調の美文を連ねたり、『朗詠集』の詩句を引いてしまふ作者の顔がのぞけてゐるのである。

(2)

次に「引歌（引詩）的美文」の例を考える。例えば、巻四第四話「範円上人往生事」の長い説話評論部の一節に次の如きがある。

あはれ、げに無常の、心にいつもひとそみて、我身に思ひをとゞめず、此世をしたふ事のなき心の付き

ねかし、しからば、吹きよぎ吹きすぐる風につけても、無常胸をこがし、南枝北枝の梅、開落ことにしてうつり、田地に水きえてあしの雫みじかく、新柳風に髪をけづる。旧苔なみに髭を洗ふ。四季の変りにも無常は心に深くしらるべきと覚えて侍り。

右に傍線部を付した(1)・(2)・(3)は、それぞれ『和漢朗詠集』の次の詩句を典拠にしている。(1)「東岸西岸之柳遅速不同 南枝北枝之梅開落已異」(上巻・早春)、(2)「氷消田地蘆鉤短 春入枝條柳眼低」(上巻・早春)、(3)「氣霧風梳新柳髮 氷消浪洗舊苔鬚」(上巻・早春)。

既に小島孝之氏が御指摘の通り、右のほかにも『撰集抄』の文章には、『和漢朗詠集』の詩句を切り継ぎして成されたものが多く存する^{ABE, V}。また氏は、『詞花集』から連続五首引いて文を形成している部分も指摘されている。「引歌的美文」の好事例なので引用する。

あはれ、こゝろ憂き身かな。なに事も夢にのみなる世中に、思ひをとゞめて、竹の葉にあられ降るなりさ⁽¹⁾ら／＼と、聞けばひとり寝ねべきこゝちもせず。たゞ、夕暮は物おもふ事のまさるかと、よそになしても問ひ、たゞ来ぬ人を恨みもはてぬ物故に、松にかゝれば末紫の藤の花、かけ樋の水のたえ／＼になり行底に影みえで、心ぼそきの音を聞くにも、胸のうづみ火消

えやらで……

(卷一—八。行賀僧都之事)

(1) (5)の典拠は、それぞれ『詞花集』卷八・恋の部に求められる。

さて、右の例はいずれも説話評論部に出る。恐らく作者は、説話の付加的部分において自己の思想を展開すべく用意したはずであろうけれども、こうした「引歌(引詩)的美文」によって、「心に深く知らるべき無常」や「無常転変の悲しみ」の主張が、意図に反して弱められてしまうという逆効果を招いていると言わねばならない。このことは、前にも述べたように、作者の、思想と文体の一致を欠いた脆弱な表現意識の顯現と見ることができよう。それは、例えば、次の如き説話部に於ける例にも窺い得る。

むかし、村上の御門の末のころ、きさらぎの十日のはじめつきた、雪いみじく降りかさなりて、月ことにあかくて、暁、梁王の苑にいらざれども、雲四方にみつ。夜、慶公が楼にものぼらねども、月千里を照す、木ごとに花さく心ちして、いづれを梅とわきがたきに、公任の中将をめして、「梅の花折て参れ」とてつかはしけるに、……

(卷八—十四、冒頭部分)

傍線部(1)・(2)は、いずれも『和漢朗詠集』卷上・雪の部

に出る。右の如くに、説話の舞台設定を語るべき冒頭の客観的描写の部分に於いてさえ、「雪」「月」との関連ですぐに朗詠の詩句を引き合いに出してしまう作者が居るのである。述懐の部分ならばまだしも、これでは、客観的なるべき語り出しの状況も詠嘆的に伝えられ、説話の事件の緊迫感³は半減させられてしまうものと言わねばならぬだろう。

さて、こうした「引歌(引詩)的美文」は、「道行文的美文」に於ける歌枕と同様、伝統的な王朝貴族文学の遺産の上に成立していると言っていいだろう。王朝の文学遺産たる『朗詠集』『詞花集』からの多量の引用のみならず、引歌の技法そのものが、それを証している。そこには、「よみたまへる歌は、大納言の歌とて『金葉和歌集』にのれるほどに侍れば、中々、ともかくも申に及ず。なほやさしくすみわたりにぞ覚え侍る」(卷二—八)などの言辭に見られる勅撰集崇拜の感情だけではなく、「やさし」い王朝貴族文学への追慕の情(それは、とりも直さず、かつて作者が現実⁴に生きていたであろう文学世界への断ち切れぬ追慕の情に外ならない)が浅からずあったろうと推察されるのである。

しかしながら、そうした美文的表现の世界が、必ずしも表現のレベルにおいて成功しているとはいえない難いであろ

と無慚には待らずや。……

(巻六—十二。三瀧觀空上人往逢近衛院三位入道事)

『方丈記』の冒頭部分を想起させるような筆致を持った右の文例には、いわば、数多の遁世者像を記録し続ける仏教者としての作者の他に、もう一人の表現者としての作者の顔がのぞけていると言えようか。確かに、右に引例した部分からは、倒置法・対句法などを駆使しつつ、緊密な筆の運びを持ち得た表現者としての作者が印象される。が、全編、そうであるとばかりは言い切れないのである。

先に述べた「引歌的美文」などの例に明らかな如く、謂わば、確固とした思想的な表現者というよりは、素質的には、より多くディレッタントとしての表現者である自己を隠し切れないでいると言えるかも知れない。さればこそ、『撰集抄』作者は、西行の和歌の特徴的な口吻を借用したのであろうか、次の如き類型的表現をも辞さないのである。

あにはかりきや、錦のしとねを出て、飾りをおろすべしとは。かけても思はましや、他国のおどろが下に骨をさらすべしとは。(巻六—一)

あに思ひきや、今かかるべしとは。かけてもはかりきや、他国辺土の山中の、おどろのもとに朽ちさせ給ふべしとは。(巻一—七)

こうした類型的表現は、情景描写に於いても見ることができる。それらは、小島氏が、「情景描写が、実は、実景

を描くのではなく、きわめて観念的に、一定のパターンによって場面を設定しているに過ぎない^{△註11V}」と述べられるように、貧弱な表現意識を示すものに他ならないと言えるだろう。

△二V

以上に見てきた種々の美文体は、終極的には、作者個人の好みの問題に還元されるところが多いだろうけれども、その作者の表現の方法を支えたであろうと思われる外的条件を、主として共時的立場から推測してみることは、可能であらうと思われる。

先ず第一に念頭に思い浮べねばならないのは、『閑居友』との関係である。近年、『閑居友』と『撰集抄』は、個々の表現に於いても、その思想的なものの受容に於いても、直接関係を持つていることが指摘されている^{△註12V}。例えば小島氏の御指摘によれば、『閑居友』から切り出された断章を利用して成る『撰集抄』の文章は、三十一条にもものぼり、それらは巻八を除いてほぼ全巻にわたっているという具合である^{△註13V}。

そこで、次に、『閑居友』の文章から、引歌、歌枕などの和歌の修辭を駆使している部分を挙げてみる。

まことに、偕老同穴契、こんよをひきかけてたのむるわざあらまじなれども、つみふかき事あまたきこゆるぞかし。もろこしの御門へ、「そらをゆかばつばさ

をならぶるとりとならん」とちぎり、やまとのしまの女ハ、「野とならばうづらとなりてなきおらん」とかこてり、あるハ「こひんなみだの色ぞゆかしき」とおもひをき、或ハ「なきとこにねん君ぞかなしき」とわづらへり。まことをいたしてとはずは、うかびがたくや待らん。つら／＼おもひつゞくれば、いけるほどは、いかなれば、ふじのたかねに事よせてたえぬおもひをあらへし、きよ見がせきおひきかけて袖のなみだおしらすに、むなしくとりべの／＼けふりとこのぼり、いたづらにあさちがはらの露ときえぬるは、いたまずしもあるらん。……

(下ノ一、津の国の山中の尼の発心事^{ハ注14})

引用の前半部は引歌、後半部は歌枕による文飾と言え。そして、これらは、各々、『撰集抄』巻二の三、巻六の十一に、詞を若干変えながら引用されている。『閑居友』にあつては、こうした表現技巧の現れる所は全体から見れば数少なく(上の三、十三、二十一、下の一に限られる)、浮わついた文飾意識は極めて抑制されていると見るべきである^{ハ注15}。しかしながら、『撰集抄』の作者は、『閑居友』から切り取った断章を適宜ちりばめながら自分の文章の中に取り込むうちに、おのずと、『閑居友』作者が抑制しながらも用いた美文体を拡張して自らの文章に反映せしめた

のではなかったろうか。なるほど、『撰集抄』と『閑居友』は、「文体」上の特色の相違点から、両者とも和漢混交文体でありながら、和文体の勝る『閑居友』と漢文体の勝る『撰集抄』とに区別されもし^{ハ注16}、そういう点からは両者は一線を画されると言ふべきかも知れないが、しかし、『閑居友』のもつすぐれて個性的な内容^{ハ注17}に接した『撰集抄』作者は、その内容に肉迫せむことを目論んで『閑居友』から、文章を盗用したのではなかったろうか。言葉を変えて言えば、『撰集抄』作者は、具体的表現そのものを盗むことによって、『撰集抄』を『閑居友』の位相に近からしめ、更に、『閑居友』作者が時折披瀝する伝統的な文学の教養を凌ぐべく、しかし、過度の文飾が結果的には弛緩した表現を招来することを知らないまゝに、美文体を駆使したのではなかったか。『閑居友』にあつては、上に例示した下ノ一の部分も、単に引用句による修辭的效果というにとどまらず、「偕老同穴の契」の破綻的事例をも示す説話的效果を狙つたものである^{ハ注18}に比して、『撰集抄』では、表現そのものは盗んだものの、説話の内質に切り結ぶ形で美文が成立しているとは称しがたい。それも、『撰集抄』作者の安易な表現意識の然らしむるところと言ねばならないであらう。

以上、『閑居友』の中の表現としての美文は、量的には

さほど多くはないけれども、『撰集抄』全体が『閑居友』の深い影響下にあるという先学の御指摘に導かれて考えたものは、『撰集抄』の美文意識及び具体的な美文体の先蹤が、ごく身近な慶政の『閑居友』の中にあつたのではないか、ということである。

しかし、すべてが『閑居友』だけに拠るとは、必ずしも言い切れぬであらう。『閑居友』が『撰集抄』の美文体の近因であるとすれば、遠因とでも言うべきものが他に存するであらうと考える。

そこで、『撰集抄』が成立したと目される、十三世紀中頃の文章一般の中に於ける『撰集抄』の文章という観点から、若干付言しておきたい。これは、粗雑に言えば、恐らくすべての表現は、甚だ個性的あるいは実験的なものを除けば、所謂「時代」の趨勢から遠くあることは出来ないだらうということである。

例えば、平安末期から鎌倉時代にかけて、僧侶や公家の手になる文章が駢儷文で書かれていたという指摘は、この『撰集抄』の文章を考える上にも示唆的であると思われる。大曾根章介氏は、次の如く述べられる。

「平安末期から鎌倉時代にかけて、僧侶の手になる表白や願文の類纂が数多く行われている。『澄憲作文集』や『言泉集』『海草集』などはその代表的なものであるが、そこ

に収録された文章はほとんどが駢儷文である。……これら

の書物は僧侶が文章を作成する時の手本として、庶民のための説教に用いたりしたものであるが、文章の中心は朗詠や唱導に適した対向にあつたといつてよからう。」また、「公家の世界においても、公的な文章はすべて駢儷文で書かれていた。先例尊重の公卿の姿勢から推しても、文章に対向が重視されたことが容易に想像される。」と¹⁹。この他にも、例えば、『平家物語』の有名な冒頭文が、安居院流説教の名調子に発するものであること²⁰、また同じくそれが仏讃歌の形式の中の「偈」あるいは「偈文」の形式に近いものであること²¹など、対句形式、七五調という美文形式の背後には僧侶の手になる文章の世界があつたことを窺わせる指摘も見られるのである。『撰集抄』作者が、貴族階級周辺の没落者で別所聖の仲間に生きる支えを見出した知識人であらうと推測されている現在²²、彼が唱導に携わっていた一人であつて唱導に適した文章の作製者であつた、即ち、修辭意識に長けた人物であつたらうとは考え易いことであると思う。また、そうした修辭技巧は唱導家としてのものばかりでなく、作者が『撰集抄』執筆に際して常に参看してきたシンメトリカルな佳句・麗句集『和漢朗詠集』に学ぶところが多かつたと言えるかも知れない。

朗詠や唱導以外にも、四六文的な対句構成の文章が流行

していたことも注意されねばならぬだろう。例えば、貞応年間成立の『海道記』には、いたる所、典型的な対句構成の文章を見ることができ^{ハ註3V}。鎌倉末期にはすでに鴨長明の作であるとする説が広く行われていたこの書物を、もし『撰集抄』作者が長明の著であると受け取る状況であったならば、『撰集抄』作者は、同ジャンルに属する『発心集』の著者であり、先輩作家である長明の文章に注意を払わないことはなかったであろうとも推測されるのである。

さて、最後にもう一点、鎌倉時代に入ってから急速な発達を見る「道行文」の影響を見逃がしてはならないだろう。その時期「道行文」の流行を見ることは、謂わば、時代が求めた意匠であったと言えるかも知れない。鎌倉時代初期に成立したとされる宴曲の歌詞が、多く道行文を取り込むのであったことは、その一つの証左となるであろう^{ハ註24V}。更に、『平家物語』卷十「海道下」に出る道行文の如く、特定の個人を定立して、流れ行く者の悲愁を描くに成功した例も見る。『撰集抄』の「道行文的美文」では、その質的なものとはかく、そこに登場する主人公は、多く西行に擬せられており、その点では、『平家物語』以前の道行文には見られなかった、特定の個人を定立した擬道行文と言えるかも知れない。

以上、謂わば「時代の意匠」としての道行文ということ

を考えれば、『撰集抄』の「道行文的美文」も、まさにその一つの現れと見ることができようと思うのである。但し今は『撰集抄』と他ジャンルの文学作品の表現との直接的な影響関係を例証する余裕を持っていないので、上のことは推測の域を出ない。

注① 山口仲美氏「説話文学の表現」(『日本の説話7』所収)。

注② 何を以て「美文」とするかは議論の分かれるところであろう。手元の辞書では、「調子を整え、美辞麗句をつづつてかく文章の書き方」(小学館版『日本国語大辞典』)という理解もなされているが、その美辞麗句と言う場合に、既に一種の価値判断が内在しており、難しさは依然残る。本稿でも、決定的な基準を持っていないが、作品通読の際、特に作者の修辭(文飾)意識が露わであると印象されるものを「美文」と呼び、それを、統一する因子によって、「引歌的美文」、「道行文的美文」などと、便宜的に区別して呼称したいと思う。

注③ 『撰集抄』の引用は、以後もすべて西尾光一氏校注の岩波文庫本による。なお、傍線などの符号はすべて私。

注④ 山口仲美氏注(1)論文。

注⑤ 今、これらの地名を、『能因歌枕』、『五代集歌枕』、『和歌初学抄』、『八雲御抄』、『和歌色葉』の五書によって確認する。五書ともに載せるのは、白山、老蘇、逢坂の関、武蔵野、富士山。四書に載せるのは、佐野の船橋、木曾の懸橋

(きそぞの橋)、三書に載せるのは、清見が関、甲斐の白根(かひがね)、浅間の嶽、まのわたり(まののうら、まのうらのよどのつぎ橋)。二書に載せるのは、鳴海潟(なるみのうら)、佐野、浮嶋が原。一書に載せるのは、うつの山となる。

注⑥ 伊藤博之氏「西行歌の享受者達」(『成城国文学論集』第十輯、昭53・2)

注⑦ 奥村恒哉著『歌枕』、P11、平凡社選書52。

注⑧ 五来重著『高野聖』(角川選書79)は、「ひじり」の特性として、「隠遁性」「苦行性」「遊行性(回国性)」「呪術性」「世俗性」「集団性」「勸進性」「唱導性」の八つを上げている(P30)。なお、目崎徳衛著『漂泊』(角川選書78)は第九章で「聖としての西行」を考察している。

注⑨ 小島孝之氏「『撰集抄』形成私論(二)」(『実践女子大学文学部紀要』20)

注⑩ 松田武夫氏「和歌と物語との交渉」(『国語と国文学』S34・4)参照。

注⑪ 小島孝之氏「『撰集抄』形成私論」(『国語と国文学』S52・5)

注⑫ 永井義憲氏「閑居友の作者成立及び素材について」(『日本仏教文学研究』第一集、豊島書房、昭42・4)、吉田けい子氏「閑居友と撰集抄」(『女子大国文』第73号)、小島孝之氏の注9・11論文など。

注⑬ 小島氏の注11論文。

注⑭ 『閑居友』本文は、浜千代清氏「校本閑居友」による。なお引用文の傍線部の典拠は、①白楽天・長恨歌の一節「在天願作比翼鳥」。②古今集卷十八「野とならばうづらと鳴きて年は経むかりにだにやは君はこざらん」(堤中納言物語・花桜折る少将は、二・三句目を「うづら」となりてなきおらむ」に作る)。③後拾遺集卷十「夜もすがら契りしことを忘れずばこひん涙のいろぞ床しき」。④古今集卷十六「声をだにきかて別るる魂よりもなき床にねむ君ぞ悲しき」。

注⑮ 青山克弥先生「閑居友」の成立過程に関する一試論(『説話・物語論集』創刊号)は、美文の用いられる箇所の特徴から、『閑居友』成立の問題を論じておられる。

注⑯ 峰岸明氏「和漢混濁文の語彙」(『日本の説話』7所収)

注⑰ 藤本徳明先生「閑居友」不浄観説話の成立(『説話・物語論集』第二号)、原田行造先生「閑居友」の玄賓説話の性格と編者の意識(『説話・物語論集』創刊号)などに詳しい。

注⑱ 小林保治氏「閑居友」序説(四)(『早稲田大学教育学部学術研究』第20号)。

注⑲ 『岩波講座日本語10』P70~71。

注⑳ 関山和夫氏『説教と和芸』(岩波新書)P69。

注㉑ 永積安明氏『軍記物語の世界』(朝日選書113)、P58。

注㉒ 伊藤博之氏「撰集抄における通世思想」(『隠遁の文学』所収)。

注㉓ 例えば、第一段から、

惜しからぬ命の さすがに惜しければ 投身の淵は 胸の底
に浅し 存しがひなき心は なまじひに存したれば 断腸の
棘は 愁の中にしげる

注② 宴曲の道行文を考察したものに、外村南都子氏「早歌にお

新入会員名簿

第二六回(昭和五三年卒)

荻山美智子	三三二	川口市中青木四二二	二二一八〇三
小泉 智子	二九七	千葉県茂原市下永吉四六〇	
熊沢喜久子	九一〇	福井市順化一〇九一七	
小林 三保	五一九	〇五 三重県度会郡小俣町	明野三八七
佐藤 恵一	五〇一	一三二 関市桜ヶ丘一	関高校 教員住宅
下川 和彦	八三三	福岡県筑後市馬間田一三五八	
清島 正子	九二〇	金沢市橋場町一〇一三六	蚊野方
本田みさと	一七三	東京都板橋区柴町一七	
滝波 康子	九一四	敦賀市松葉町 杉原永和方	
山森 泉	九二〇	金沢市長土塀二一八一十一	
中野 定子	九二二	〇二 加賀市山代温泉十一区	祥山荘六号室

ける道行の研究——地名列举の意味するもの」(『中世文学
の研究』東大出版会・所収)がある。宴曲「海道」の道行文
は、掛詞的に地名を列举するなど、『撰集抄』よりは手が込
んでいたようである。

東出 和夫	九二二	〇三 加賀市松山町チ九六	
水野美智子	六〇一	一三 京都市伏見区醍醐下山口町八	A三二〇九
牧 久子	九三〇	富山市中川原一〇四	
増田 典子	九二〇	金沢市彦三町一丁目五十三	松本方
松本 玲子	九二九	一六 石川県鹿島郡鹿西町 能登部下	鳥毛方
水上 澄子	九三九	一四 砺波市安川二六六一	
干場 成世	九二一	金沢市新神田	
山本 睦子	九二〇	金沢市小立野一丁目二二一二	
上田ひろ美	九三〇	一一 富山市太郎丸一区五四七	
梶岡 信行	九二五	羽咋市千里浜町 県営はまなす団地三	
近野 優子	三三〇	大宮市大和田町一 一三八一 柴田方	
里見真理子	九二〇	金沢市小立野二丁目一七七八	
山本 均	九二五	〇一 石川県羽咋郡志賀町	字高浜町ヤ四九